

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 米谷 匡史 印

学位申請者 千葉雄

論文名 ドストエフスキー文学にみる内在性と超越性:ミハイル・バフチンの  
ポリフォニー論と小林秀雄の洞察の実存論の比較研究

千葉雄氏から博士学位請求論文「ドストエフスキー文学にみる内在性と超越性:ミハイル・バフチンのポリフォニー論と小林秀雄の洞察の実存論の比較研究」が提出されたことをうけ、2022年3月9日開催の総合国際学研究科教授会にて審査委員会が選任され、審査が開始された。

審査委員会は、米谷匡史（本学教授、日本思想史・アジア論）が主査を務め、沼野恭子（本学教授、ロシア文学）、友常勉（本学教授、日本思想史）、桑野隆（元早稲田大学教授、ロシア思想）、岩崎稔（本学名誉教授、元主任指導教員、哲学／政治思想）という5人の委員から構成されている。なお、同論文は、事前審査（2022年2月5日）を経て、その際の助言と承認に基づいて改訂されたうえで提出された。

審査委員会は、各委員がそれぞれの見地から論文を精査し、詳細に吟味した上で、2022年6月19日に対面形式での最終試験を実施した。その結果、本委員会は全員一致で千葉雄氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であるという結論に至った。

## 【論文の概要】

本論文は、通常ロシア文学研究とはいささか異なる作業から成り立っている。ドストエフスキーの作品世界に対する対極的な解釈といえるミハイル・バフチンと小林秀雄の読解を突き合わせ、比較対照することを通じて、とりわけ小林秀雄の読解をあらためて再評価し手掛かりとしながら、ドストエフスキーの作品がはらむ可能性を読み解く論文である。千葉氏は、一方でバフチンが論じる「対話」的で水平的な世界理解の価値を高く評価しつつも、他方でそこでは十分に論じ尽くされない「沈黙」に耳を澄ます垂直的な実存経験について、小林秀雄の読解に導かれながら考察している。バフチンと小林秀雄のドストエフスキー解釈を突き合わせる創造的な再検討の作業を通じて、ドストエフスキー文学の受容をめぐって生まれ得る思考のドラマとその思想的意味について、仔細に検討した研究論文となっている。

論文は全体として、第一部でバフチンを内在的に再検討し、第二部ではそれと対比しながら、小林秀雄のドストエフスキー論を手掛かりに議論を進めていくものであり、章立て

は以下のような構成になっている。

## 序論 本論文の課題と構成

### 第一部 バフチンのポリフォニー論

#### 第一章 モノロギズムとダイアロギズム

#### 第二章 メタ言語学とドストエフスキー文学

#### 第三章 作者と主人公の対話的關係：ポリフォニー小説は民主主義国家か？

#### 第四章 ポリフォニー小説の統合の原理：対話によるオーケストレーション

#### 第一部の結び

### 第二部 バフチンとの比較でみる小林秀雄のドストエフスキー論

#### 第一章 バフチンと小林秀雄の言語論

ーバフチンの『マルクス主義と言語哲学』と小林秀雄の『様々なる意匠』

#### 第二章 小林の批評にあるモノローグの眼

#### 第三章 小林秀雄のドストエフスキー論にある断絶と超越性

#### 第四章 戦後のドストエフスキー批評に登場する「対話」

### 終章 本論文の総括

バフチンは、そのドストエフスキー論においてポリフォニー小説の意義を強調した。このバフチンによるドストエフスキー理解は、今日の研究史のなかでも、あるいはより広い現在の思想の文脈のなかでも、妥当性を持つものとして広範に受容されている。バフチンの解釈では、対話は、主人公や登場人物同士だけではなく、作者と主人公の関係においても成り立つ。ポリフォニー小説における「対話的な呼びかけ」という態度は、作者が主人公に対しても、主人公が作者に対しても行使される。ここにおいて作者と主人公の対等な関係が成り立ち、主人公が自立的な存在として描写される、という。このように、ポリフォニー小説の作者は、「対話的呼びかけ」という態度で創作することを、主人公と同じく義務とし権利とすることにより、より自立的な対話を作品内に生み出していることになる。このような対話的な作品世界のあり方は、千葉氏が強調するように、民主主義において為政者と市民が対話の共通の場におかれることに類比できるものである。

他方で、小林秀雄のドストエフスキー論は、むしろ「モノローグ」の側面を徹底させることで独自の解釈を示した。小林の批評はそれによって、同時代に広く見られたシェストフやE・H・カーなどによる「モノローグ的」なドストエフスキー理解とも一線を画す水準に至りついている。千葉氏によれば、戦前の批評において、小林は当時一世を風靡していたシェストフなどの批評からいち早く脱却した。小林は、ドストエフスキーの創作方法に関して、自己とは何かという作者の実存的な問いや、言葉にできないような極限的な経験の自己告白こそが彼の創作の動機であると理解したからである。そしてそのような問いや経験を主人公に付与することにより、作者と主人公は一体化した関係となる。小林によれ

ば、作者ドストエフスキーの透徹した意識によってモノローグ的視野が徹底されるからこそ、かえって整序された因果による世界が解体されるのだという。

このように、バフチンと小林という時間も空間も異にする二つの解釈類型を対照させることは、本論文においては、けっして恣意的な選択ではなく、むしろ現代の思想における布置関係が意識されている。千葉氏によれば、批評家小林秀雄は、日本の近代文壇のなかにあった権力システムの体现者のごときものとして、ある時期には特権的ともいうべき評価を受けてきた。彼の特異で簡潔なある種の名人芸的な文章や、マルクス主義やリベラルが掲げる普遍的なものに対して、あくまで個別の経験の側に寄り添っているかのような乾いた語りのスタイルなどは、一時期には日本の国語教育の範型としてすら機能していた。しかし、このような権威付けは、1970年代以降の柄谷行人を代表とする新世代の、非常に透徹したポストモダン的な批評、瀆神的とも見える批評によって、一気にそのアウラを吹き消された。柄谷以後の日本文学における批評は、まったくその光景を変えてしまい、小林秀雄の批評は、彼のドストエフスキー論も含めて顧みられることは少なくなった。千葉論文は、そうした転換の必然性は理解しつつも、いまにいたるそのような批評をめぐる趨勢に違和感をいだくところから出発して、小林秀雄のかつての仕事の可能性をあえて救出的に読み直そうと試みている。そのために、ポリフォニーのバフチンとモノローグの小林という二つの類型をあえて突き合わせて再検討している。

こうした本論文の戦略は、「バフチンの対話を論じることにより、小林のモノローグの性質が炙り出され、そこから小林を論じることにより、バフチンのポリフォニー論の性質が逆照射される」という千葉氏の言明に集約できる。そして、この議論の戦略から明らかになることは以下の諸点である。

小林秀雄によるモノローグを徹底させる解釈の根底にあるのは、対話における「声」がミュートになる沈黙・断絶の局面を、ドストエフスキー文学に読み込んでいく営みである。『罪と罰』論や『白痴』論において力を込めて小林が批評する「主調低音」とは、どれもこの声ミュートになる「断絶」とも言える局面であった。「白痴」論においては、主人公の世界との不協和、あるいは人間社会での不協和に重点が置かれている。小林がドストエフスキー文学に愛着を持って批評するのは、このような「断絶」の局面である。それは誰かへのけものにされ、モノとして扱われるということではなく、自分の存在自体がもはや存在してはいけぬ、人間社会に自分が存在すること自体が、人間社会をつなぐ人間性と背反するというような事態であった。ドストエフスキー作品のなかの殺人者の実存は、まさにそのような「断絶」の局面に立たされている。

そして、この「断絶」をめぐる小林の批評は、透徹した「眼」という批評に行き着く。小林が考える「声」が消失したドストエフスキーの世界は、作者の見る「眼」が徹底された世界であり、言葉の伝達不可能性が垣間見られる局面である。このような「垂直」や「眼」を抛り所とした批評は、言葉によって誰でも了解可能になる水平的なあり方ではなく、その「断絶」の局面を経験した者にしか了解し得ないものであり、時空を超えた本来的なも

のである。こうして本論文は、ポストモダン的な批評や解釈においては顧みられることが少なくなった「超越的なもの」や「本質的なもの」に肉薄し、小林秀雄のドストエフスキー論を手掛かりとしながら、ドストエフスキーの作品世界がはらむ可能性を豊かに論じている。

#### 【審査の概要および評価】

上記の論文をめぐり、2022年6月19日に本学の海外事情研究所会議室にて実施された公開の最終試験では、初めに千葉氏が論文の意図と達成について報告し、その後に各審査委員と千葉氏の間で質疑応答が行われた。

総じて審査委員は、本論文が、①いずれの評論・作品もたいへん丁寧に読みこんでおり、わかりやすく論を進めている、②〈内在性〉と〈超越性〉、〈声〉と〈眼〉などとして示される二項対立による説明が効果をあげている、③民主主義との関連づけなど、バフチンのポリフォニー論の政治学的な「応用」可能性を的確に指摘している、④バフチンのポリフォニー論では十分に深められず欠落となっている沈黙の問題を言い当てている、⑤関連する先行文献を適切におさえた上で説得力のある議論を行っている、などの諸点を挙げて、高く評価する点で共通していた。

しかし、審査では同時にいくつかの疑問点も指摘され、千葉氏自身のさらなる見解を問い尋ねるやり取りもあった。それは、①第一部のバフチンの解説がやや冗長であり、千葉氏自身が独自にドストエフスキーのテキストから具体例を抽出しながら、バフチンのポリフォニー論をより精密に読み解いていくことが必要だったのではないかと、②小林秀雄のドストエフスキー解釈を中心にして、バフチンはあくまでも参照項として扱った方が良かったかもしれない、③バフチンの対話・ポリフォニー論は、ロシアにおいても異質なものであり、バフチンの著作のなかでも初期のものには見られず、その後の著作とは異なっていたことが十分にふまえていない、④声の特権性、音声中心主義への批判が不十分であり、本質主義的な記述が不用意に見られるのではないかと、⑤ドストエフスキーの作品は、福音書へのオマージュでもあり、対話と断絶の両面を描くことができた理由について、さらに踏み込んだ論議がほしかった、などの異論や疑問であった。

これらに対して、千葉氏から真摯かつ率直な応答があり、自らの論考で明らかにし得た点とその限界、今後に残された課題について明確に自覚していることが見て取れた。また、審査委員による上記の疑問や指摘は、本論文の達成や貢献を高く評価した上で、それをさらに深めていくために提示されたものであり、その研究成果の価値を損ねるものではないことは、審査委員の共通認識であった。

#### 【審査の結果】

以上の審査をふまえて、審査委員会は全員一致で、千葉氏の博士学位請求論文「ドストエフスキー文学にみる内在性と超越性:ミハイル・バフチンのポリフォニー論と小林秀雄の

洞察の実存論の比較研究」は、ドストエフスキー解釈の二類型を丁寧に論じ、その作品世界のはらむ可能性を豊かに論じた労作であると確認し、千葉雄氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると結論づけた。